

8) アユ種苗の輸送前の給餌量が輸送ストレスに与える影響－2

澤田 宣雄

【目的】「アユ種苗の輸送前の給餌量が輸送ストレスに与える影響－1」と同様に輸送後における斃死や冷水病の発生を防止または軽減することを目的として試験を行った。本試験では放流体型まで仕立てた種苗について、輸送前の給餌量と輸送後の生残率、冷水病の発生状況を調べた。

【方法】平成10年11月下旬に漁獲され、加温処理（漁獲直後23℃、3日間処理し、その後1週間後に28℃、3日間）と薬剤投与の併用による冷水病対策を行い、地下水（18±1℃）で約100日間飼育したアユ（平均体重5.9g）を平成11年3月3日に90cmガラス水槽（水容量125ℓ）に約500gずつ10の試験区に分けて収容した（表1）。供試魚は細菌性エラ病の兆候がみられたので、収容直前に2%食塩浴を10日間行った。

収容後5日間は各試験区とも給餌率2～2.5%とし、その後の6日間において各試験区毎に給餌率および輸送までの餌止め日数を変えて飼育した。

輸送試験は3月15日に行った。各試験区のアユを水8ℓを入れた120cm×82cmのビニール袋に酸素詰めし、水を張った1トキャンバス水槽に浮かべ、トラックで1.5時間走行した。なお、走行以外の作業を含めると、アユを酸素詰めしていた時間は3時間であった。その後、アユを再びガラス水槽へ収容し10日間飼育した。

表1. 各試験区の給餌率と餌止め日数

試験区	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
餌止め日数	0日	0日	1日	2日	3日	0日	1日	2日	3日	1日
給餌率	3%					4.5%				1%

注) 試験区1は輸送をしない対照区とし、試験区2～10において輸送を行った。

【結果】本試験においては、輸送中や輸送直後における斃死は全ての試験区においてみられなかった。また、輸送後10日間の飼育においても、全ての試験区で冷水病の発生および斃死はみられなかった。

冷水病の治療対策試験では加温と投薬を併用した方法が最も効果があるとされている。今回用いた種苗は、同法により治療され、放流体型まで仕立てられたものである。このような種苗であれば輸送前の給餌率の多寡（1～4.5%）や餌止め日数（0～3日）に関わらず、輸送後の冷水病の発生はないものと思われた。